

明治安田生命 2016年度入社式 社長挨拶（要旨）

明治安田生命保険相互会社（執行役社長 根岸 秋男）は、新入職員を迎え、入社式を行ないました。以下のとおり、社長挨拶の要旨をお知らせします。

1. 生命保険業界を取り巻く環境と当社の挑戦

- 国内生命保険マーケットは、高齢化・長寿化・単独世帯化の進展により、医療・介護などの第三分野商品や年金などの貯蓄性商品へのニーズが拡大傾向にある。さらに超低金利環境下において個人金融資産の運用不安が拡大するなか、「社会保障制度の補完」を担う生命保険会社の社会的役割はますます重要となり、多くのビジネスチャンスが存在する魅力的な市場となっている。
- 新しい保険会社の新規参入や販売チャネルの多様化等、国内生命保険マーケットは本格的な商品・販売チャネル大競争時代に突入している。こうしたなか、当社は「対面で寄り添うあたたかなアフターフォロー」の価値を訴求し、従来からの生命保険を選択する際の評価軸である「保障内容」、「価格」に加えて、「アフターフォロー」を第三の評価軸として創出・定着させる挑戦をしていく。お客さまのご連絡先や保険金・給付金のご請求の有無を能動的に確認する当社独自の制度「MY長寿ご契約点検制度」もその挑戦の一つである。
- また、当社は海外進出も積極的に進め、昨年度は「長期的な視点」や「お客さま志向」といった共通の文化を有する米国の「スタンコープ社」を子会社化した。若い力をスタンコープ社との新たな関係づくりに活かしてもらいたい。
- また、2年目を迎えた「明治安田生命Jリーグ」については、「全従業員がサポーター」を合言葉に全社を挙げてJリーグを応援し、「地域社会への貢献」に積極的に取り組んでいく。

2. 当社の歴史と「明治安田NEXTチャレンジプログラム」の取り組み

- 当社は125年の長年にわたってお客さまの安心を守ってきた歴史と伝統のある生命保険会社であるとともに2004年1月に合併した21世紀生まれの若々しい会社でもある。歴史において最大の危機は2005年の2度にわたる行政処分であるが、当社は「お客さま満足度の徹底追求」をはじめとする数々の挑戦を成し遂げることで、着実に「お客さま満足度」調査の結果が上昇するなど、社会やお客さまからも高い評価と信頼を得る会社となった。
- 当社は「感動を生み出す生命保険会社」の実現をめざしており、その実現に向けた経営戦略として、対面のアフターフォローを重視した感動サービスの積み重ねを通じ存在感を向上させる「ブランド戦略」。国内生命保険事業において第三分野での大胆な挑戦、海外保険事業等では収益拡大にむけた多様な挑戦等を行なう「成長戦略」。それらを支える「経営基盤の強化」に向け、挑戦意欲あふれる人財の育成・確保を目的とした「人財力改革」や、余力の創出とイノベーションの推進に向けた「働き方改革」など、積極果敢な挑戦を展開している。

○2014年度にスタートした中期経営計画の「明治安田NEXTチャレンジプログラム」は、企業価値の継続的かつ着実な向上をめざし、次の10年においても財務基盤の健全性と収益規模を維持・拡大させるための「基盤づくり」を行なう「3ヵ年計画」である。本プログラムの集大成と位置付ける2016年度は、「基幹チャネルである営業職員チャネルの抜本的強化」「各種改革等の推進を通じた経営基盤の構造的な見直し」「次なる成長に向けた調査・研究・開発」を三本柱として、次期中期経営計画における「攻めの経営へのフェーズチェンジ」に向けた態勢固めを図っていく。

3. みなさんに期待すること

【仕事に対する強い使命感を持つ】

○生命保険は、相互扶助の精神のもと社会保障制度を補完する重要な役割を担っている。何百万という数の保険契約の1件1件が、そのご家族の愛や想いがこもった命綱にほかならない。このような、お客さまお一人おひとりの「想い」を肌で感じ、生命保険業に携わる者としての「強い使命感」を持って、自身の仕事に向き合ってほしい。

【「挑戦意欲あふれた活力ある人財」をめざす】

○「感動を生み出すプロフェッショナル人財」（「高い志と倫理観を持ち、果敢に挑戦する人財」、「自らの強みを発揮し、持続的に成長する人財」、「多様な価値観を尊重し、信頼の絆を深める人財」）として、当社の限りない挑戦を支えてほしい。当社は個々の成長や自己実現を強力に支援していくので、挑戦意欲あふれる姿勢を期待している。

【「先見性」を身に付ける】

○生命保険業界や当社を取り巻く環境は大きく変化を続けており、今後、想定を超える大きな変化が起きることも予想される。激動の時代のなかを「勝ち抜く」ためには、常にアンテナを高く張り、社会情勢や経済環境、お客さまの動向を正確に把握し、遠い将来の変化をも的確に予測しながら、未来への周到な準備を行なうことが重要。現状に安住する日々を過ごすのではなく、誰よりも前向き、周囲から前のめりと思われるぐらいの姿勢で物事に取り組んでほしい。

以上